

猫かわら版



今からおよそ一八〇年前の江戸時代。二人の猫好きが、おかしな本を作った。戯作者、つまり、小説家の「山東京山」が物語を書き、浮世絵師の「歌川国芳」が絵を描いたその本は、題して『朧月猫の草紙』

主人公は、鯉節問屋「又たび屋粉衛門の飼い猫、おこまちゃん」とある事件から、愛しいとらさんと駆け落ちするが、その後、運命は二転三転。波乱万丈の猫生活をおくることになる。

物語の舞台は鎌倉である。鶴岡八幡宮、長谷寺といった場所が登場し、漁師や尼寺が出てくる。鎌倉は江戸時代当時も人気

の観光地。古都の匂いを楽しみながら読むのもよい。

とはいえ、『朧月猫の草紙』は、江戸時代に発売された読み物。当時の人なら、すらすら読んで笑い転げていたものでも現代人からすれば難しく、理解しがたい内容であったりする。

物語が始まる前に、「日本猫の起源」を儒者の家の猫から聞きかじったこととして記されている。

平安時代の昔、猫という動物は、この頃、高麗(こま)の国から日本にやって来たのだろう。また『源氏物語』や『枕草子』にも猫が愛された話しが出る。



また、江戸時代ほど猫の多い場所はないが、その理由は、町が繁盛して鼠が多かったからだという。

